雪まつりの面

折口信夫

青空文庫

一昨々年の初春には、苦しい目を見た。信州下伊那の奥、新野（にひ）の伊豆権現の雪祭りに、早川さんと二人で、採訪旅行をしたことであつた。さうして、一週間といふもの完全に、小忌人（ヲミビト）の様な物忌みをして、村の神事役の人と共に一つになつて、祭儀の観察をさせて貰うてゐた。其揚句が、ちよつとの行き違ひから、村の大勢の人たちに反感を催されて、私の頭に、消防組の鳶口の一撃位は、来さうなけはひを感じた。あんな残念な事はなかつた。けれども、毎年新暦の正月十三日になると、今一度、信遠三の境山に囲まれた、あの山村の祭りに、あひたくてならない気がする。其中でも、殊に印象深く残つてゐるのは、正祭の前日の面しらべの行事であつた。大小二十に余るお面を、棚に並べておいて、其を上手（ワデ）と称する当役その他の人々が、てんでに新しく、胡粉や、丹で彩色する事であつた。村の人は、此について、合理的な何の説明もせなかつたけれど、かうする事が、年々新しく、お面を作るのとおなじ効果のあるもの、と言ふ信仰を印象してゐる事が考へられた。だがもつと、古く或は、日本的といふことを超越して思ふと、死者のますくに、毎年新しい生命を与へる為の技術のなごりが、仄かに残つてゐる様な気がして、蝋燭の瞬きが、何とも言へない古代の古代を、空想させた事であつた。

彩色せぬ面もある。其は三つの鬼の面である。十年ほど前の夏、私が此村を訪うて、種紙屋と間違へられた事があつた。其後、この伊豆権現が焼亡した相である。其頃天井（アマ）にあげてあつたお面祭器類も、持ち出す事が出来ないで了うた。其後お祭りの為に、お面を神事役の年よりが、皆より集つて彫刻したのである。鬼などは、精巧過ぎる程に出来てゐる。此が素人の手になつたとは思へぬ程である。でも、どの面と、どの面とは、誰の作と言ふ事が訣つてゐる。而も、当事者以外には、わかつても知らぬ顔でゐるらしく、又そんな事を考へるのはわるいと思ふ為か、大した年月も経ないのに、今では問題にもなつて居ない。さうして、年役の人々は、皆それ〳〵〳〵のお面の形相を評して、不思議な事には、どれもこれも、皆昔のお面に生きうつしだと言うてゐる。中には、自分自身刻んだお面に対して、さう言ふ風に言うてゐる人もあるのだ。さう考へねばならぬのか、祭りになつて愈、お面がはたらき出すとさう感じるのか、私には判断はつかぬが、ともかくも、気むづかしさうな、ひそ〳〵声で、神秘さうに話して聞かした。私は、村々の古典生活の調査に当つて、過重な感激に囚はれる事を、避けたい態度だと思うてゐる。其私すらも、此時は変な気がして、早川さんと、顔を見あはせた。其後も度々、二人で此を一つ話にした。

この村などは、明治初年この辺一帯に行はれた、奴隷解放運動に似た、被官廃止の騒動の余波を激しく受けて、旧来の歴史を随分に一蹴した事実もあるのである。伊豆権現を携へて、茲に居を占め創めた、村の古い開発者の後の、伊東家を逐うた記憶を、あれは、村の為によい事をした、と感じてゐる人々もある位の処なのであるが、其で居て、かう言ふ気持ちも、失はずに居るのである。此村の春祭りについては、村の有識仲藤さんの記述を得て、読者のお目にかけたいと考へてゐる。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集　3」中央公論社
　　1995（平成7）年4月10日初版発行
底本の親本：「『古代研究』第一部　民俗学篇第二」大岡山書店
　　1930（昭和5）年6月20日
初出：「民俗学　第一巻第四号」
　　1929（昭和4）年10月
※底本の題名の下に書かれている「昭和四年十月「民俗学」第一巻第四号」はファイル末の「初出」欄に移しました。
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2007年4月8日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪まつりの面

折口信夫

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/